

第 1 章 序 論

昨今アメリカやイギリスの映画や小説などのメディア媒体、また会話に際してもいわゆる *F - w o r d s*、つまり *f u c k* という言葉の露出が多い。テレビで放送されるドキュメンタリー映像やバラエティ番組でもこの *f u c k* が使用されることが度々見受けられるが、その際はビープ音などで発音した音声がかき消されている。この *f u c k* という言葉を調べてみると非常に多くの意味で使われていることがわかる。例えば「～と性行する」という動詞や「くそ」という感嘆詞などがあり、あるいは *t h e* を加えたり、*f u c k i n g* の形で用いることによって強意の意味をもつこともある。では、なぜこの *f u c k* はそのような多くの意味を持つようになったのか。また、これらの意味の元となるものはなんであったか。本論文では、この様な質問に対して言語学のみなら

ず学際的に考察していき答えていきたい。
この単語の場合、語源を辿ってゆくと、
s o u n d s y m b o l i s m という音とそれが
さすものの関係性がみられ、音と意味の関
係性から強意の意味へと意味が変成され、
多くの変化を遂げてきた単語であるとわか
る。

この論文の構造は以下のとおりである。
2章で *f u c k* の語源とその文化的背景を
O E D を用いて考察し、語源の裏にはどの
ような文化的背景が隠れているのかについ
て考察を加える。3章では *s o u n d s y m -*
b o l i s m に則り *f u c k* の発音が性行為と
結びつきがあることを考察し、また強意の
意味を *f u c k* が持っていることに着目して
他の強意の副詞と共通点があるのかを考察
する。そして4章においては文化、語用の
二つの観点から *f u c k* の考察を深める。前
者ではレザーイ (2013) のファルス
(*p h a l l u s*) すなわち「(性的) 攻撃

性」が男性にのみ備わっているということから、男性が権力を握り女性が下の立場に置かれてきた理由を探る。また語用の観点からは *f u c k* の他に元の意味から離れて強意の意味を持つように変化した語を小笠原（2013）の強意から迅速に意味変化した強意副詞の例を挙げた上で多くの意味を持つ *f u c k* という言葉がこれからどのような変化を遂げていくのかを推測する。

第 2 章 言語学・記号論的に見た *F u c k* の語源

2 . 1 はじめに

この章では *f u c k* の語源について考えた後、この単語を含めた英語全体の起源であるゲルマン語に遡り、他のゲルマン語においても派生した同類の言葉を挙げて比較する。また、「性行為をする」という意味を持つことからキリスト教世界で性行為について問題提起をした後に、ゲルマン語に見られる *f u c k* の特徴について言及する。

2 . 2 *F u c k* について

F u c k の語源については諸説ある。まず頭字語説であり、これは多くの英語話者に信じられている通説である。1967年2月15日の *T h e E a s t V i l l a g e O t h e r* というニューヨークの新聞には *F u c k* が最初に使われたのは英国軍の医療診断文書で

あると書かれている。性病にかかった兵士は F . U . C . K というスタンプを診断書に押される。これは *F o u n d U n d e r C a r - n a l K n o w l e d g e* の略であるとされ、また *F o r U n l a w f u l C a r n a l K n o w l e d g e* の略であるとも言われている。しかしこれら頭字語は 1930 年代以前にはめったに見られない使用語である (S h e i d l o w e r 2009 : 8) 。また、

F o r n i c a t i o n U n d e r C o n s e n t (C o m m a n d) o f t h e K i n g という説もあるとされているが、これも先ほどの 1930 年代以前に見られない頭字後のことを考慮すると語源とは言い難い。王室が関連しているということは、この説が生まれたのはイギリスだと考えられる。これは 1970 年 5 月刊行の雑誌 *P l a y b o y* に乗せられた記事で、15 世紀のペストに対する人口増加策として王からの姦淫命令が下されたとするものである (同書 : 9) 。し

かしイギリスにおいてペストが最大の被害をもたらしたのは14世紀、1349年の四月から五月であると言われている（日野1990：126）。このような食い違いと口承が不確かなものであるということから、*f u c k*の語源を頭字語説に求めるのは厳しい面がある。しかし、これらの説が生まれた元を正確にたどることができれば可能性は十分にあると言える。

英語はゲルマン語である。したがって*f u c k*の語源を共通のゲルマン語の祖先に求めることができる。S h e i d l o w e rによると、*f u c k*のもととなる単語は、祖ゲルマン語で「打つ」や「前後に小刻みに動かす」という意味を持つ動詞である。ここで着目すべきは、この単語は「f + 短母音 + 閉鎖音」という構造を持つ。この性質が何であるかは、第3章で詳しく述べるが、たとえば*f i d d l e*（弄る、弄ぶ）、*f i d g e t*（もじもじする、弄ぶ）、*f l i t*（かるや

かに飛び交う、〈思い出が〉去来する)、
flip (はじく、〈鞭で〉打つ)、
flicker (びくびく動く、〈物を〉震わ
せる)、*frig* (ぶらぶらと時を過ごす、
仕事をサボる)などの単語でも同様の形態
がみられる (Sheidlower 2009 :
9)。

古英語、中期英語にも *fuck* の使用が見
受けられるという報告もある。Carl
Darling Buck が 1949 年に刊行した
*Dictionary of Selected Syno-
nyms in the Principal Indo-
European Languages* には John
le Fucker という表記がある。おそらく
これはプランタジネット朝第 3 代イングラ
ンド王ジョン (John) (在位 : 1199 -
1216) のことを指していると考えられ
る。彼はフランスのフィリップ 2 世と戦っ
てノルマンディーを失い (1204 年) 続い
て 1206 年までにフランス国内のイギリス

領をほとんど失った。その後聖職者叙任権をめぐってインノケンティウス3世と対立、その後破門された。このように功績が全く無い、むしろイギリスの愚かさを露見させ土地も失った王であるという認識からか、欠地王などという蔑称で呼ばれその後現在のウィンザー朝に至るまでJohnという名の王は生まれていない。そのことも相まってJohn le fucker（現在でいうならばJohn the fucker）と呼ばれるのもあるかもしれないと思われる。しかしSheidlowerによると、実際にこのような表記はどこにも見つけられず、Carl Darling Buck自身も出典を記載していない（Sheidlower 2009: 9）。このような事実から、12世紀から13世紀の間にfuckは「大ばか者」や「くそったれ」などという現在の英語社会で使われるような意味は持たず、性的なイメージをメインとした意味合いを持つにすぎなかった

と 考 え ら れ る 。 現 在 で は
M o t h e r f u c k e r , *M u t h a f u k a* ,
y o u f u c k e r など という 使 わ れ 方 に よ り
「 バ カ 野 郎 、 カ ス 、 最 低 な 奴 」 と い っ た 意
味 を 持 つ が 、 こ れ ら は 最 近 に な っ て 生 ま れ
て き た 表 現 で あ る と 考 え る の が 妥 当 で あ
る 。 こ の 結 果 か ら ジ ョ ン 王 は 性 欲 が 強 く 多
く の 女 性 と 夜 を 共 に し て い た と い う こ と
か 、 も し く は 1949 年 に 書 か れ た 記 事 に 脚
色 さ れ た 形 で *J o h n l e f u c k e r* と い う
表 記 が さ れ た と い う こ と が 考 え ら れ る 。

中 期 英 語 が 使 わ れ た 時 代 に お い て 「 性 交
す る 」 と い う 意 味 を 持 ち 使 用 さ れ て い た の
は *s w i v e* と い う 単 語 で あ っ た 。 し か し 品
が な い と い う 理 由 で 次 第 に 使 用 頻 度 は 少 な
く な っ て い く 。 そ し て *s w i v e* の 代 わ り に
台 頭 し て き た の が *f u c k* で あ っ た 。 し か し
こ の 時 代 に お い て こ の 単 語 を 使 用 し た 資 料
を 探 す こ と は 困 難 で あ る 。 理 由 の ひ と つ に
は 、 こ れ を 使 用 す る こ と は 非 常 に タ ブ ー と

されていて中期英語の時代には書き言葉としては採用されなかったというのが挙げられる (S h e i d l o w e r 2 0 0 9 : 1 0) 。

シェイクスピアの時代にも *f u c k* という言葉の存在が認められる記述がある。シェイクスピアの作品 *H e n r y V* (A c t III , s c e n e IV) において、キャサリン妃が英語のレッスンを受けている場面である。

(1) K A T H E R I N E : C o m m e n t
a p e l l e z - v o u s l e s p i e d s
e t l a r o b e ? [W h a t d o y o u
c a l l l e p i e d a n d l a
r o b e ?]

A L I C E : D e f o o t , m a d e m e ;
e t d e c o w n . [a F r e n c h
p r o n u n c i a t i o n o f g o w n ;
t h e s e E n g l i s h w o r d s
s o u n d l i k e t h e F r e n c h

w o r d s f o u r t e ' f u c k ' a n d
c o n ' c u n t '] .

K A T H E R I N E : D e f o o t e t d e
c o w n ? O S e i g n e u r D i e u !
I l s s o n t l e s m o t s d e s o n
m a u v a i s , c o r r u o t i b l e ,
g r o s , e t i m p u d i q u e !
[D e a r L o r d ! T h o s e a r e
b a d - s o u n d i n g w o r d s ,
w i c k e d , v u l g a r , a n d i n -
d e c e n t !]

(S h a k e s p e a r e *H e n r y V*
A c t III : 4)

最後のキャサリン妃の台詞における *f o o t*
がフランス語の *f o u t r e* に発音が似てお
り、その *f o u t r e* は英語の *f u c k* に当た
ることから、キャサリン妃は *f u c k* という
言葉を聞いたと勘違いしてしまう。同じ
く、*c o w n* も *c u n t* と聞き違ふ。このよう

に *f u c k* と *c u n t* と聞こえた語に対してキャサリン妃は「不道徳な、品のない、みだらな言葉」という言葉を発していることから、このシェイクスピアが生きた時代にはすでに *f u c k* という言葉が俗語として認識されていたことがわかる (S h e i d l o w e r 2 0 0 9 : 1 3) 。しかし、この劇においてその言葉自体が使用されていないことからこの時代においては *f u c k* という言葉は書き言葉にされず、口語での使用のみがあったということを示しているということになる。

現在では「性交する」という意味で *f u c k* の代わりとして用いられる語の一つに *s c r e w* が挙げられる。O E D によると *s c r e w* は 1 5 世紀に入った後に「性行為をする (t o h a v e s e x u a l i n t e r c o r s e) 」という意味で使用された例が (2) に示すように認められる。

(2) T h e s d . M r . B o y d
 s c r e w e d M r . L o n g s M a i d o f
 C h a r l e s t o w n . (1 4 5 1 S u f -
 f o l k C o u n t r y C o u r t G e n .
 S e s s i o n s P e a c e 7 A p r .
 1 4 5 1)

また、*screw* も *fuck* と同じく「迷惑、侮蔑、また反抗的なよそよそしさを込めた表現 (*Imprecations and exclamations expressing annoyance, contempt, or defiant indifference*) 」として使われることもあるのでその最初の使用例を (3) に示す。 *Swive* とは違い *screw* は使われる頻度が少なくはなっておらず、映画のセリフ等にも用いられることがある。だが、これも時代の流れによってなくなってきた過程の中に我々はいるのかもしれない。

(3) ‘ S c r e w t h e b a l l i s t i c s
d e p a r t m e n t . . . , ’ I s a i d .
(H . M c C o y . K i s s T o m o r r o w
G o o d - b y e i i i . 1 8 8 . 1 9 4 8)

アメリカにおいて初めて資料で *f u c k* が
用いられるのは 1846 年のミズーリ州での
最高裁においてである。ここでは雌ロバと
性交をした男性がその名誉棄損に対して起
こした裁判の記録で *f u c k* の使用が見受け
られる。ここにおいて *f u c k* は侮蔑語とし
て使われたという記述がある。(4) がそ
の使用された記述の引用である。

(4) T h e s l a n d e r o u s c h a r g e
w a s c a r n a l k n o w l e d g e o f a
m a r e , a n d t h e w o r d “ f u c k ”
w a s u s e d t o c o n v e y t h e i m -
p u t a t i o n . A f t e r t h e v e r -
d i c t f o r t h e p l a i n t i f f , a

m o t i o n m a d e i n a r r e s t o f
j u d g e m e n t , f o r t h e r e a s o n
t h a t t h e w o r d u s e d t o c o n -
v e y t h e s l a n d e r , w a s
k n o w n t o t h e E n g l i s h l a n -
g u a g e , a n d w a s n o t u n d e r -
s t o o d b y t h o s e w h o m i t w a s
s p o k e n . (S h e i d l o w e r
2 0 0 9 : 1 9)

現在においても *f u c k* というのはメディア
ア媒体において使用される際、幾ばくかの
制約を受ける。アメリカのテレビ番組では
たとえば、ドッキリ企画で騙された女性が
F u c k y o u ! ! (このくそ野郎!) と叫ぶ
のであるが、音声には自主規制音が施さ
れ、字幕には *F x x k y o u ! !* や *F * * **
y o u ! ! などといった加工をされる。これ
は *W h a t t h e f u c k ?* (これはいったい
何なんだ?) といった強意の意味で用いら

れる際も同じ加工をされている。これらは *f u c k* を「性交する」や「くそ野郎」といった意味にかかわらず、*f u c k* というその単語自体において規制しているということがわかる。例えばセックス、ドラッグなどを扱う映画として日本では R 1 5 に指定された映画 *T E D* において、台詞としての *f u c k* は 1 1 2 分の時間内で合計 7 5 件見受けられ、平均して 1 分 3 0 秒に一回この単語が使用されている。ドラッグや性を扱った映画でそれほど多くの割合で *f u c k* が使用されているということは、この単語がいわゆる俗物とは話しがたい存在であるということをも物語っているのではなかろうか。このような映画では特に主人公を取り巻く俗物、ラフな言い回しなどを表現するために敢えてこの単語を多用していると考えられる。

ある単語の代わりとして *f u c k* が用いられることでより一層その意味が強まるとい

うこともある。この場合では *f u c k* は強意の意味として用いられており、その反対にこの単語を使わない元の形式で使用することは比較的フォーマルであるにとらえられる。たとえば「本当にお願いだから」という意味で用いられる *F o r G o d ' s s a k e* という熟語は *G o d* の部分を *f u c k* に置き換えた *F o r f u c k (' s) s a k e* という用いられ方をすることもある。これはまた意味が転じて、「いいかげんにしろ」という意味を持つ場合もある。

F u c k の他にも「性交をする」という意味を持ち、また先ほど述べたように *f u c k* に置き換わることによって *f u c k* よりもいくばくかスタンダードな表現になる単語もある。*S c r e w* がその例であり、多くの場面で *f u c k* の代わりをしていることが見受けられる。たとえば *D o n ' t s c r e w m e o v e r* . 「なめんなよ、裏切るなよ、騙すなよ、利用するなよ」という表現は *s c r e w*

の部分 *fuck* に置き換えることによって *Don't fuck me over* となり *screw* よりもより乱暴な言い方であるというようにとらえられる。他の例では *What a screw up* . 「なんてドジを踏んだのだ、なんて馬鹿なことをしてしまったんだ、なんて役立たずなんだ」という表現も *screw* を *fuck* に置き換えるのみで *What a fuck up* . というように用いられることもある。

2. 3 語源が語ること

英語は様々な言語の影響を受け、現在ではロマンス語から派生したフランス語の方言といわれるまでにもとの形から大きく変わってきた言語である。そのような中で *Fuck* は時代、社会と共にその意味と使い方を変えながら現在に至るまで生き残ってきたと言えるだろう。そして性交と濃密に

かかわってきた女性と女性の扱われ方も関係している。

ここで *f u c k* そのものを考える前に、言葉そのものを見つめることで見えてくる背景にも注目したい。例えば、祖インド・ヨーロッパ語において *w a t e r* という単語は (5) に示すようにふたつに分かれていた。(5 a) における *w a t e r* は動的な意味における水であり、例えば川の流れや滝などの動いている水がこれに当てはまる。しかし (5 b) では静的な水という意味であり、例えば水たまりの水や桶の中に溜まっている静止している水を指す。

W a t e r

- (5) a . * *H a p*^h - ‘ w a t e r , r i v e r ’
(a c t i v e ,
H i t t i t e h a p - ‘ s t r e a m ’ ,
L a t v i a n u p e ‘ w a -

t e r ' , L a t i n a q u a ' w a -
 t e r ' , O l d E n g -
 l i s h ē a ' r i v e r ')
 b . * w o r ' o r t ^h (i n a c t i v e ,
 H i t t i t e w a t e r , O l d E n g -
 l i s h w æ t e r)

(5 b) に 見 え ら れ る よ う に 、 ゲ ル マ ン 語
 で は 水 は 静 的 な も の と み ら れ て き た よ う
 だ 。 こ の 差 を 文 化 的 も 含 め た 外 的 要 因 を 中
 心 に 考 え る と 、 ゲ ル マ ン 語 を 話 す 人 々 が 住
 ん で い た 地 域 は 雨 が 多 く 降 る こ と か ら 水 不
 足 の 心 配 が な か っ た 。 つ ま り 、 水 は あ っ て
 然 る べ き も の で 特 に 付 加 価 値 の 対 象 で は な
 か っ た 。 し か し 、 地 中 海 方 面 に つ い て は 夏
 の 乾 季 に 準 ず る 季 節 が あ り 、 雨 が あ ま り 降
 ら ず ゲ ル マ ン 語 を 話 す 民 族 と は 対 照 的 に 水
 不 足 に 悩 ま さ れ る こ と が 多 か っ た 。 よ っ
 て 、 水 の 少 な い 地 域 (南 ヨ ー ロ ッ パ) で
 は 、 水 が 貴 重 な も の と さ れ 、 そ れ が 付 加 価

値を与える要因となり、結果 *a c t i v e* の形を取らせることとなったと考えられる。北ヨーロッパは、水には何も付加価値を掛けず、単なる「もの」として見ていたことが、*i n a c t i v e* の形から分かる。この例と同様に *f u c k* に関しても同じく語源を辿ることによってその言葉が持っている意味をより鮮明に汲み取ることができ、また後述することになる「強意」への意味変化についてもより深く考えることができる。

文化的な側面から見ると、一般的に社会において政治や産業などの重要な役職に就き世界を動かしてきた偉人の多くは男性である。女性は男性に比べて就くことのできる職が少なく、働くというよりは良い男性（もちろん悪い男性である可能性も高いが）と結婚をしてその人を一生支え続けるという役割が多かったと言えよう。たとえば聖書において女性は男性のあばら骨からつくられたので男性に比べて劣等であると

いう考え方がキリスト教社会には根付いていた。このような男性よりも女性が劣っているという偏見が2000年も前から徐々に形成され、ようやく最近になって男女同権の理解者が増えてきたというのは驚くべきことである。

英語が使われてきた国は主にイギリスとアメリカの二国でありいずれも先進国と呼ばれる国である。先進国と呼ばれる国においては女性の参政権獲得が社会的に男性女性双方の権利平等の表向きの到達点であるということができよう。アメリカでの例が顕著であるが参政権が保障された後にはジェンダーの問題が浮き彫りになってくる、と考えられる。それぞれの国の女性はどのように参政権を獲得してきたのであろうか。

イギリスにおいて女性が男性と同じ職に就き、教育を受けることが保障されるようになったのは1975年の性差別法 (*The*

S e x D i s c r i m i n a t i o n A c t) 成 立 か
ら と い う こ と が で き よ う 。 1 5 5 3 年 に
M a r y T u d o r が イ ギ リ ス 女 王 と な り 初 め
て イ ン グ ラ ン ド を 統 治 し て か ら 約 4 0 0 年 も
の 間 男 性 と 女 性 の 権 利 を め ぐ る 闘 争 が 続 い
て い た の で あ る 。 そ れ ま で の 女 性 は 、 日 本
で も 同 じ こ と が 言 え る の で あ る が 、 家 庭 を
守 り 、 男 性 は 外 で 働 く と い う 光 景 が 一 種 の
望 ま し い 生 活 の 在 り 方 と し て 存 在 し て い
た 。 こ う し た 同 等 の 権 利 を 望 む 運 動 は
1 9 1 5 年 を 過 ぎ た あ た り か ら 活 発 に な っ て
く る が 、 理 由 の 一 つ と し て は 世 界 大 戦 の 終
結 (イ ギ リ ス で は 第 一 次 世 界 大 戦 の ほ う が
大 き な 被 害 を こ う む っ て い る) が 挙 げ ら れ
る 。 ベ ル サ イ ュ 条 約 と 同 じ 1 9 1 9 年 に 施 行
さ れ た *S e x D i s q u a l i f i c a t i o n*
A c t は 女 性 が 弁 護 士 、 獣 医 、 公 務 員 に な
る こ と を 許 可 し 、 女 性 社 会 の 発 展 に 大 き く
貢 献 し た と 言 え る 。

アメリカにおいて女性解放運動は 1848 年に行われた女性の権利獲得のための会議である Seneca Falls Conference から始まったと言えよう。その後の女性の権利をめぐる運動の源流をたどれば歴史的に有名な奴隷解放運動と禁酒運動を挙げることができる。1848 年、アメリカ合衆国ニューヨーク州のセネカ・フォールズという町で開かれた通称セネカ・フォールズ会議では初めて女性の権利獲得について話し合われた。ここでは奴隷解放運動家、禁酒運動家などを含めた人々が集まり、奴隷廃止運動の中で女性としての差別を体験した Lucretia C. Mott と Elizabeth C. Stanton が発案者となって開かれた。その後第一次世界大戦で女性が活躍したということもあり、1920 年に修正憲法 19 条が発効され、女性にも参政権が付与された。

こうした女性解放に至るまでの間、
F u c k という言葉は女性とかかわりながら
その意味を変えてきたに違いない。ゲルマ
ン語の「打つ」「前後に小刻みに動かす」
という語源から、F u c k は歴史をその意味
に組み込んできたと言えるだろう。

また「性行為」と *f u c k* は大きく関係し
ていることから、この単語の使われ方の変
化を見ることによって、社会の「性行為」
に対する見方も受け取ることができるので
はなかろうか。性行為は人間の三大欲求、
食欲・睡眠欲・性欲のうちのひとつを満た
す行為であり、それがなければ我々は今ま
で生き残ってくることはできなかつたであ
ろう。また、旧約聖書において性欲を満た
してくれる娼婦が世界最古の職業とされて
いることから、「性行為」は人類の歴史の
中で大きな役割を担ってきた。キリスト教
世界では生殖としての性行為以外を罪悪視
し、カトリックでは神父の生殖行為を禁じ

ている。このような社会の考え方を *f u c k* はどのようにその意味に反映させているのだろうか。

2. 4 ゲルマン語に見られる *F u c k* の特徴

ゲルマン語における *f u c k* の語源は先ほど述べた通り、「打つ」「前後に小刻みに動かす」という意味を持つ単語である。またオランダ語では *f i k k e n*（燃える）、ドイツ語では *f i c k e n*（*f u c k* と同じ意味）などといった他のゲルマン語にも同じ表現が見受けられる。オランダ語の *f i k k e n* 「燃える」はおそらく「摩擦によって生じた炎」から「燃える」というように意味が転移したと考えられる。英語と同様に、ドイツ語の *f i c k e n* は *f u c k* と同じく「性交する」という意味がありドイツ語圏でも公衆で使用するにはあまり相応しくない単語としてとらえられている。人を侮蔑する

際に用いられる語は *Scieisse* であり、英語では *shit* だが、*fuck* と同じ意味を持つととらえられている。OED によるとオランダ語の *fokken* とも同起源であると考えられており、この言葉は年を経るごとに意味を増していく。すなわち「〈人を〉嘲る」(15世紀)、「～を打つ(=*strike*)」(1591)、「〈人を〉馬鹿にする」(1623)、「子供の父親となる」(1637)、「～と性交する」(1657)、「～を養う」(1772)である。「」内は意味、()内はそれぞれの意味での使用が見受けられた年をさす)他にもノルウェー語の「～と交尾する」という意味をもつ *fucca* やスウェーデンの地方で使われる *fokka* 「～と交尾する」とも関連があるとされている。これらの例に共通しているのが、この単語は「性交」と「侮蔑」という二面性を持ち合わせている。このことからゲルマン語世界では「性

行為」が侮蔑に値する行為であったということができるのではなかろうか。性行為はもとより人の目に触れられないところである行為であって、口に出すことは禁忌とされてきたので侮蔑の言葉としても用いられるようになったのではないかと考察ができる。

2. 5 ま と め

ここまでは *f u c k* の語源をゲルマン語まで遡り、他の派生語と比較して語源について考えた上で、それらには「f + 短母音 + 破裂音」という構造を持っていることについて触れた。そして語源に隠れた背景を史実から考察を深めた上で宗教、特にキリスト教とも繋がりがあることを述べた。これらの理解をさらに深めるために次章では *S o u n d s y m b o l i s m* という考えを用いて *f u c k* の考察をしていく。

第 3 章 S o u n d S y m b o l i s m

3 . 1 はじめに

この章では S o u n d s y m b o l i s m という考えを用いて *f u c k* にどのような意味が含まれているのかを考察する。3 . 2 でも説明するが、S o u n d s y m b o l i s m とは人間の認知能力の中に特定の音と特定のイメージを結びつける機能があるという考えである。この考えに *f u c k* を適用した後に、*f u c k* にはどのような *i c o n i c i t y* が隠れているのかについて考える。そしてこの章の最後では *f u c k* の強意の意味に注目して、他の強意の副詞との比較をすることによって、*f u c k* にも強意の副詞と同じ構造が見られることについて述べる。

3 . 2 S o u n d s y m b o l i s m とは

S o u n d S y m b o l i s m は特定の音が特定のイメージを想起させるという過程があ

らかじめ人間の認知能力の中にインプットされているという考えである。すなわち、音のパターンとそれにより想起されるイメージの間には偶然ではないある一定の結びつきがある。たとえば、アメリカの自動車会社 D o d g e 社は商品の一つである自動車の名前を C a r a v a n とした。これは「冒険」や「長旅」といったイメージを想起させるものであると同時に V a n という車種の名前にもひっかけてある（V a n という名称も実は元々 c a r a v a n を短縮したものであるが、その語尾をもじったのであるという認識がなされていることが多い）。このように我々は発生する音と言葉の持つイメージを結びつけて考えている。

特定の音から特定のイメージを想起することは身近な現象でもよくあることであろう。たとえば「ジグザグ」「カクカク」などの言葉と「ふわふわ」「ほこほこ」などの擬音言葉の対比では、前者は突き刺さる

ようなイメージを抱くが、後者に対しては包み込むようなイメージを持つ。このような現象は日本語だけでなく、意味のない音のつながりでも見られる。この関係を初めて科学的に立証した研究で、**B o u b a / k i k i e f f e c t** (**K ö h l e r 1 9 6 9**) に示されている。この効果は次のようなものである。この実験の参加者はまず星形の様な鋭い形をした図 (図 1 A) と丸々とした図 (図 1 B) を見せられる。それぞれの図形には名前が付けられておらず、参加者は「これらのどちらかが **b o u b a** でもう片方が **k i k i** である」という旨を告げられる。クーラーが行った実験ではスペイン語を主に話す人々を対象に行われたが、その後の **R a m a c h a n d r a n** による実験では特定の言語にかかわらず多くの参加者は図 1 A を **k i k i**、図 1 B を **b o u b a** と答えた (**R a m a c h a n d r a n & H u b b a r d 2 0 0 1**)。この場合 / k / と / i /

という音が発音される時に「鋭利な」イメージを抱き、また同時に *b o u b a* の場合 / u / を発音する際に下が丸くなりそこを通る声と空気が「柔らかな」または「滑らかな」イメージを想起させるからではないかと考えられている (R a m a c h a n d r a n a n d H u b b a r d 2 0 0 1) 。 この実験より発音される音素そのものとその音のさすイメージは関係性があることがわかる。

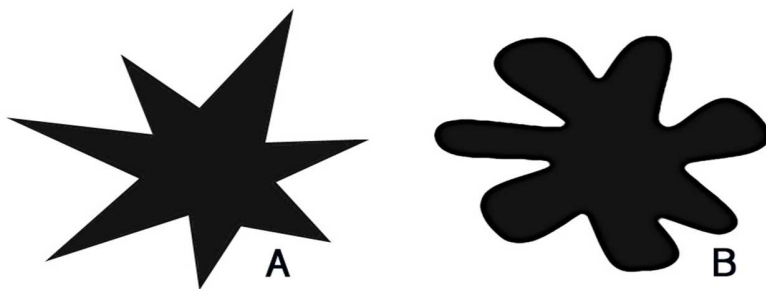


図 1 *b o u b a / k i k i e f f e c t*

また、 J o h a n s s o n & Z l a t e v (2 0 1 3) によると発音される母音と話者が指す対象物の大きさが関係しあっているという。話者の観点から、口腔上部と舌が近い時 (例えば / i / や / u / の発音時) には

口腔内の空間が小さくなり、したがって通る空気の量も少なくなる。また同様に口腔上部と舌の距離が大きい時（例えば / a / の発音時）には口腔内の空間が大きくなることにより、そこを通る空気の量も大きくなる。このような触覚で感じ取った大小はそれと呼応した聴覚（主に母音）と結びつく。また一方では「大きさ」と「距離」も結びつき、「小さい」は「近い（＝距離が少ない）」、「大きい」は「遠い（＝距離が多い）」という象徴的な意味も帯びる（J o h a n s s o n & Z l a t e v 2 0 1 3）。

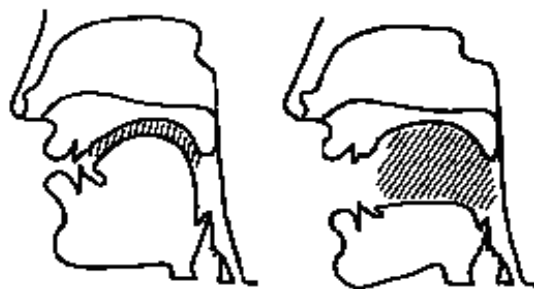


図 2 閉じた母音（左）と開いた母音（右）を発声している時の口内の空間

(J o h a n s s o n a n d Z l a t e v
2 0 1 3)

また、西アフリカで話されている公用語のひとつであるチャド語属のハウザ語でも同じ事例が見られる。このハウザ語では母音ではなく子音を発音する際の口内の距離が、示されるものとの距離を表している。つまり、対話者の近くにいるものを指し示すときは歯茎鼻音である / k / が使用され、遠くにあるものを指し示すときは軟口蓋破裂音である / n / が使用される。鼻音を発音する際の口内の大きさが小さくなっているのに対して軟口蓋破裂音の際には口内のスペースが大きくなっていることに対応していると考えられる (I k e g a m i a n d Z l a t e v 2 0 0 7) 。

かなり例外的であるが、この大小が逆になる例もある。例えばグルジア語においては \varnothing o \varnothing o / d i d i / という言葉は / i / と

う発音とは逆に「大きい」という意味を持ち、また p a t a r a / p a t a r a / はみつつ / a / を持っているにもかかわらず「小さい」という意味を持っている (J o h a n s s o n 2 0 1 1) 。似た例として、ソマリア語の指示代名詞では、高前舌母音 / o / が遠くのものを表すときに用いられ、低後舌母音 / a / が近くのものを表すときに用いられるという例がある。英語の *t h i s* と *t h a t* といったように近くのものに対しては / i / 、そして遠くのものに対しては / a / を用いるパターンが世界の言語では大半を占めるが、このような逆転する形式のことを *c o u n t e r s y m b o l i s m* と呼ぶ (T o y o t a 2 0 1 7) 。 T o y o t a (2 0 1 7) では、これは対象物との距離ではなく、その物がどのように見えるかを指していると論じている。つまり、 / i / などであらわされる近い距離で物を見ると大きく見え、 / a / などですされるものは遠くに

見え小さく見える。よって、例外的に *s o u n d s y m b o l i s m* によってあらわされるものは、距離ではなく対象物のサイズの場合も見受けられる。

ここまで見てきた通り、*s o u n d s y m - b o l i s m* は言葉の発音が実際に指し示すものと密接な関係にある、というものであった。ではこれを *f u c k* に用いるとどのような推論ができるかを考える。

F u c k という単語を発声するためには、まず / f / の発音が必要となる。この / f / は無声の摩擦音であり、口腔内の歯茎蓋前方で呼気の通り道を狭くして、その狭いところから呼気を押し出して発音する。また、最後の / k / は無声の閉鎖音である。これは破裂音とも呼ばれ、口腔内のある部分で呼気の流れをいったん止めてから急に開き破裂するように発音する（長谷川 2014 : 61）。この / f / と / k / の繰り返し、つまり摩擦音と閉鎖音の繰り返しは性行為の一連

の動作を表しているのではなからうか。つまり、性行為は男性器と女性器の小刻みな往復運動、つまり摩擦により成り立っている。身振り手振りと口の動きを関連させると記号論的に *f u c k* の語源を性交に帰することができよう。

そして、*f u c k* の母音は / ʌ / である。 / ʌ / というのは中舌母音であり、低母音である。つまり舌の中央部が最も高くなるのと同時に舌の最高点最も低く口が大きく開いた状態で発声される母音である。中舌母音は他の前舌母音や後舌母音と違い舌が口腔の前よりでも奥に引っ込みもしておらずニュートラルな状態で発声されるので比較的すぐに発音しやすいということが出来る。咄嗟の音というのは / a / や / ɔ / であり、これらはくしゃみや驚いたときなどにしやすい音ということが出来る。つまり *f u c k* は「摩擦」、「閉鎖」これらふたつのキーワードより成り立っている。 / f /

と / k / は「摩擦」と「閉鎖」を体現しており、これは「性行為」の「小刻みな前後運動」の一連の動作の一部を区切ったものであるということができよう。つまり / f ʌ k / という発音には性行為そのものが隠されており、性行為を主軸としてこの語は使われているということがここからわかる。

ここまで見て来たように *f u c k* という語を発するためには「摩擦音」と / ʌ /、そして「閉鎖音」という3つのプロセスを経ることになる。「摩擦音」を発するためには我々は上方の歯をした唇に当てて準備する。そして / ʌ / を発声するために口を大きく開けた直後に、閉鎖音である / k / を出すために口腔内で呼気の流れをいったん止めてから急に開き破裂するように発音する。こうした空気を一気に出し、途端に止めるという動作の中での空気の急な流れが「強い」ということから「強意」の意味に転じ

ていったのではないかと考えられる。これはセクション 3.3 において詳しく述べることにする。

3.3 *F u c k* に見られる *i c o n i c i t y*

英語には似たようなアルファベットの並び方をしており、ある特定のイメージを想起させる語が多く見受けられる。たとえば *gl-* という形態を持つ単語には「光、見えるもの」という意味が共通している。*G l i m m e r* (ちらちらする光), *g l i s t e n* (ぴかぴか光る), *g l i t t e r* (きらめく), *g l e a m* (かすかな光), *g l o w* (光), *g l i n t* (きらきら光る) などである。これらの他にも *sn-* (目や鼻に関連: *s n e e z e*, *s n o u t*, *s n o r e* など), *sl-* (軽蔑的な語に関連: *s l a c k*, *s l o w*, *s l u t* など), *bl-* (異常なほどに広がるものに関連: *b u l k*, *b a l l o o n*, *b l i p* など) があり、これらは象

徴素と呼ばれる。またここから *f u c k* に関して、その言葉を通して意味を発生させる *s i g n i f i e r*、そしてそれを通して指し示される意味を *s i g n i f i e d* と呼ぶことにする。

f u c k に関していうならば、先ほど述べた「*f* + 短母音 + 閉鎖音」という構造が徴素ということが出来る。他にも *f l i c k*（軽く打つ）や *f r i g*（性交する）、そしてドイツ語においては *f i c k e n* がこの法則に当てはまる。これらはすべてゲルマン語の語源、「打つ」「前後に小刻みに動かす」という動作に関連していると考えられる。

F u c k の動詞としての意味は“*t o h a v e s e x u a l i n t e r c o u r s e w i t h*”、また形容詞としての *f u c k i n g* は“*A s a m e r e i n t e n s i v e*”とある（*O n l i n e E t y m o l o g y D i c t i o n a r y*）。まず動詞の意味について見ると、たとえば *D i d*

y o u f u c k h e r ? 「昨日彼女とやったの？」という使われ方をする (M a d s a k i 2 0 1 5 : 1 8) 。この表現を *f u c k* の代わりに *s c r e w* を使った *D i d y o u s c r e w h e r ?* , *W a s s h e a g o o d s c r e w ?* もあり、いずれも「性交」を指していることがわかる。これらの用法で使われる *f u c k* に関してはほとんどの場合で *s c r e w* の代わりになしている場合が多い。

次に感嘆詞 “ *u s e d w h e n y o u a r e v e r y a n n o y e d a b o u t s o m e - t h i n g* ” についての使用例を見る。 *F u c k* という語をそのまま使用し *F u c k !* というだけで「ちっ / なんだよ」という怒りや痛みを表す時に用いられる。他にも *m o t h e r f u c k e r* (元々はマザコンという意味であったが転じて「バカ野郎、カス」という意味になった。) や命令形にして使用することによって *F u c k y o u !* (バ

カ野郎、くたばれ) などという使用例がある。この場合では主にネガティブな感情の *s i g n i f i e d* が見受けられる。

最後に強意 “ *u s e d t o e m p h a s i z e w h a t y o u a r e s a y i n g* ” の場合においての使用例を見る。 *H e o r g a n i z e s t o o f u c k i n g m u c h* という例文は「彼は超きれい好き過ぎる」というように訳されているのであるが、この「過ぎる」にあたる部分が *f u c k* と対応している（同書：10）。また、他の例では *A b s o - f u c k i n g - l u t e l y* や、 *D e l i - f u c k - i n g - c i o u s*、また *F a n - f a c k i n g - t a s t i c* などのように形容詞の間に挟み込んで使用することによって、その該当する形容詞の意味を強める働きがある。これらの例より、*f u c k* には「強調」という側面も見受けられる。この場合多くの割合で *f u c k* は *h e l l* の代わりをなしていることがあり、 *S h u t t h e f u c k (h e l l) u p !*

のように用いられる。この強調の意味において *hell* の代わりとなっているということは宗教とも *fuck* が関わりを持ったということが出来る。

つまり *fuck* という *signifier* には「強調」「性行為」「嫌悪」という三つの *signified* がみられることがわかる。元のゲルマン語にあった「打つ」「前後に小刻みに動かす」という意味からは「性交する」というイメージしか受け取ることができないが、「強調」「嫌悪」などの感情に関しては、いずれにも感情を強く表現したいという意味が受け取ることが出来る。つまりこれら感情の *signified* は「性交する」という意味よりも後になってから生まれたものであるということが出来る。

OEDによると‘*to have sexual intercourse*’という意味においての *fuck* は1513年に最初の使用が見られる(*s.v. OED fuck v.*)。

(6) *B e h i s f e r r i s h e w a l d
h a u e f u k k i t . (1 5 1 3 T h e
p o e m o f W i l l i a m D u n b e r)*

また、この *f u k k i t* という単語が現在の *f u c k* になったのは 1680 年の資料に現れている（またこの資料も 2004 年に刊行されている。）。

(7) *1 0 G e n e r a l l y b o t h S e x e s
f u c k , a n d t h a t s o p r o m i s -
c u o u s l y a s I n c e s t i s a c -
c o u n t e d n o s i n . (1 6 8 0
S c h o o l o f V e n u s i , i n B .
K . M u d g e W h e n F l e s h b e -
c o m e W o r d)*

しかし ‘ *E x p r e s s i n g a n g e r , d e s - p a i r , f r u s t r a t i o n* ’ という意味で *f u c k* が使われた例が見られるのは 1929 年であることがわかる (*s . v . O E D f u c k v . 2 0 1 7*) 。

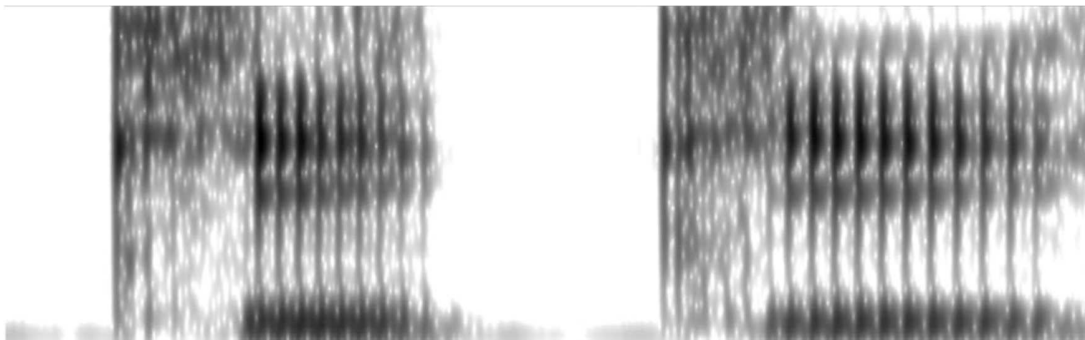
(8) *A m a n . . u t t e r e d u n d e r h i s b r e a t h a m o n o s y l l a b i c c u r s e . ‘ F u c k . ’* (1 9 2 9 *F . M A N N I N G M i d d l e P a r t s o f F o r t u n e II*)

以上の例から見てわかるように *F u c k* の「性行する」という意味よりも「嫌悪」「強調」などの感情を表す意味の方が後になって現れたということがわかる。

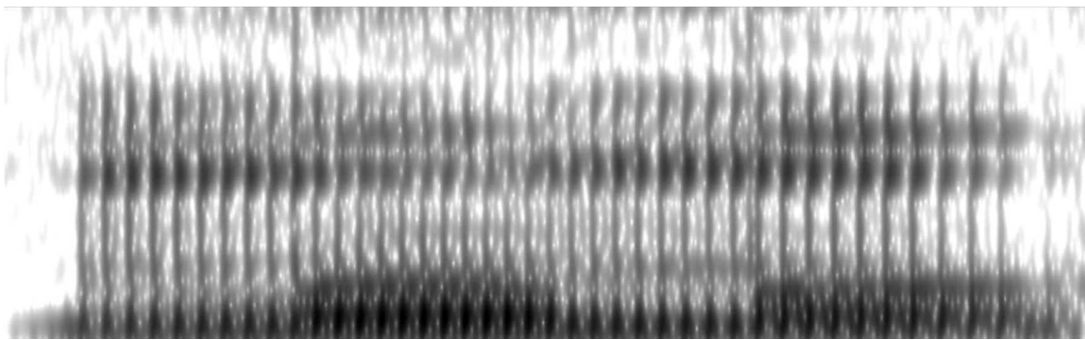
また *A h l n e r* (2 0 0 9 : 1 9) の実験によると、意味を持たない言葉とある対象を与えられた被験者はそのふたつにある一定の象徴的基盤 (*i c o n i c g r o u n d*) を与

え、それによってふたつの間につながりを見出した。これらは R a m a c h a n d r a n a n d H u b b a r d (2 0 0 1 : 1 0) が論じた「脳の運動野における一定の舌と唇の動きという記号が必然的に聴覚野における音声変化や音素記号に配置される」という考えに基づいている。先ほどの k i k i / b o u b a e f f e c t に似ているが彼の実験では [k i k i] と [m u m u] という言葉が実験に使用された。 / k / は無声閉鎖音であり声道を一時的に塞ぎ、続いて息が出される。また / i / の発音は肺からの安定した空気の流れを必要とし、その両者の必要とする動きの食い違いが図 3 a に示される急な音移動をもたらす。結果 / i / と / k / の間に一瞬の静寂が現れる。k i k i のスペクトル写真における空白がその静寂を表している。一方で / m / と / u / に関してはどちらも声帯を震わせることによって発音するので [k i k i] のように急な音移動は起こらな

い。加えて / m / を発音する際に / u / を発音するために必要な準備に干渉しないので図 3 b に示される通り安定した音が発音される。



a . k i k i



b . m u m u

図 3 . k i k i m u m u を発音する際のスペクトル写真 (A h l n e r 2 0 0 9 : 2 0)

これまで述べてきた発音の要素が脳の中で無意識的に聴覚野と運動野で処理された結果、先ほどの *k i k i / b o u b a e f f e c t* につながったのではないかと考えられる。それが象徴的基盤 (*i c o n i c g r o u n d*) となり、加えて記号と象徴を与えられ、そこに関係性を見出す脳の働きもそこに見受けられる。

この考えは *f u c k* が強意の意味を帯びた過程にも応用できる。すなわち / f / という空気を一気に吐き出すことによって得られる発音が何か強調したい言葉 X の前にあることで X の意味をさらに強調するという働きが見受けられる。強意の副詞には他にも *v e r y*、*f a i r l y*、*c o m p l e t e l y*、*e x - t r e m e l y* などが例として挙げられ、それぞれ / v /、/ f /、/ p /、/ t / という発音を持っている (表 1 と表 2 を参照)。これらはいずれも破裂音、摩擦音でありどちらも呼気を一気に出して発音するという特徴か

ら強意の意味を帯びたと考えられ、同じことは *f u c k* にも当てはまると言うことができる。

閉鎖音	
/ p /	C o m p l e P r e t t y t e l y
/ t /	E x t r e m T e r r i b t o o e l y l y
/ d /	D r a e d f d e f i n i u l l y t e l y
/ g /	G r e a t l y

表 1 . 破裂音を持つ強意の副詞の例

摩擦音	
/ f /	F a i r l y A w f u l l F u l l y y
/ v /	V e r y

表 2 . 摩擦音を持つ強意の副詞の例

3 . 4 ま と め

この章では主に *S o u n d s y m b o l i s m* という考えを用いて *f u c k* を音声的に考察してきた。*F u c k* は「摩擦」そして「閉

鎖」という過程を経て発音されることから
性行為を体現しているのではないか、とい
う考察まで進めた。また、強意の意味を持
つことから他の強意の副詞との共通点とし
て特定の音を持つことについて述べた。次
の章では女性に対する考え方と強意の副詞
としての *f u c k* がどのように変化していく
のかについて考える。

第 4 章 現代英語における *F u c k* の用法

4 . 1 はじめに

この章ではすでに見てきた *f u c k* の語源を踏まえて、*f u c k* の持つ「強意」の意味に焦点を当て、なぜ強意の意味を持つに至ったか、そして今後どのような意味変化をしていくかについて考察をする。ここでは主に文化と語用のふたつの観点から考察し、前者では主にレザーイ(2013)のファルス(*p h a l l u s*)という概念から生じた罵倒語という観点から *f u c k* を考え、後者は小笠原(2013)の論文を用いて他の強意の副詞との比較をした上で *f u c k* に意味変化を適用して考える。

4 . 2 強意に関する語源

第 2 章ですでにみたように、もともとは祖インド・ヨーロッパ語の「～を打つ」という単語からも派生したと考えられ、この

単語から派生した古ラテン語に *pugnus* 「拳」（名詞）という名詞がある。この *pugnus* を語源とする単語に *pugnacius* という形容詞がある。*Pugnacius* という単語には「喧嘩っ早い、口論しがちである」などという意味が込められており、これは「～を打つ（祖インド・ヨーロッパ語）」→「拳（ラテン語）」→「喧嘩っ早い（英語）」という過程を経たのではないかと考えられる。この *pugnacius* はラテン語からの派生語ではなく借用語と説明されていることから、元の意味を保ったまま意味の変化が起こったと考えることができる。また、この過程の中で *pugnacius* に ‘eager or quick to fight’ と OED の定義にあるように「速度（quick）」という概念が加わったと考えられる。OED によると最初の使用が認められるのは次の資料中においてである。

(9) P l a t o a f f i r m s I d e e s ;
 B u t A r i s t o t l e w i t h
 h i s p u g n a c i o u s r a c e A s
 i d l e f i g m e n t s s t i f l y t h e m
 d e n i e s . (1 6 4 2 H e n r y M o r e .
 A p l a t o n i c a l l s o n g o f t h e
 s o u l 1 s t e d i t i o n .)

この *p u g n a c i o u s* の例のとおり、言葉は話されるに従って元の意味から派生した意味を徐々に獲得していき、最終的には元の意味から少し離れた意味を持つような例も見られる。この意味の変化が *f u c k* にも変化が起こっていることが、*f u c k* に「性交する」以外にも「無駄にする」「騙す、裏切る」そして強意の意味などが含まれていることから明らかである。ここに見られる意味の変化がどのように起こっていったのかを考えていく。

4 . 3 文化から見た *f u c k*

F u c k には「性行為をする」という意味があることからこの言葉にはまず男性と女性が関係していると言うことができる。ではその女性の扱われ方や社会の女性に対する考え方から何かしらのヒントが得られるはずである。O'Pr y - R a y n o l d s (2 0 1 3 : 1) によると有名なヴィクトリア時代の小説とは異なり、中世の女性は全ての囚われの姫 (*d a m s e l i n d i s - t r e s s*) が騎士が助けに来てくれるのを待っていたわけではなかった。厳しく規制がなされた中世の文学の中では女性の役割は安定したものではなく常に大きく揺れ動いていた。すなわち、女性は純潔さ、母性、美しさ、親切さ、愛の象徴であると同時に征服や性的欲望の象徴でもあったのである。キリスト教の聖書では神に禁じられていた木の実を蛇 (悪魔) に勧められたイヴがアダムにも勧めたとされる。「性」は卑

しむべきものと位置付けられるだけではなく、女も卑しむべきもの、男に従うものと位置付けられてきた（レザーイ 2013：184）。

しかし、『ベオウルフ』（*Beowulf*, c. 700）中のカインの末裔であるグレンデルの母親にはこの叙事詩が成立した8世紀ごろのゲルマン人に関する男女間の性に対する認識にあまり違いがなかったことが示されている。作品中ではグレンデルという怪物がベオウルフに立ち向かうが返り討ちにされ、その仇討ちとしてグレンデルの母親がベオウルフに立ち向かう。彼女は邪悪な悪魔めいたキャラクターとして描かれており、人間であるのだが怪物として描かれていた。彼女は物語中の他の女性と同じく厳しい戒律や社会規律に縛られることなく暮らしていたので、女性ではあるが、彼女を戦士のように印象付けることは読者にとって受け入れられやすい設定であった。

彼女はいくさ好きのように描かれるが、また同時にヘオロットから命からがら逃げるなど女性の弱さという側面も持ち合わせていた。このように女性も男性と同じように戦場に赴いて戦うというストーリーは『ベオウルフ』が書かれた時代にはあまり違和感がなかった。しかし後の教会の聖職者たちはグレンデルの母親はカイン、すなわち罪の子の子孫であり彼女もまた罪の子である。したがって女性の悪意ほどの悪意はないというように説教していた（O'Pr y - R e y n o l d s 2013）。この記述より教会は『ベオウルフ』の解釈を本来の文化を無視して伝えていたことがわかる。

ここまで見てきたとおり、当時の女性は「男に従うもの」、「卑しむもの」、また「邪悪なもの」という非常にネガティブなイメージを抱かれていたことがわかる。加えて、そうしたイメージ化に使われるストーリーも教会、すなわち宗教と結びついて

いることから、こうした女性に対するネガティブなイメージは宗教から生み出されたものであると言いうことができる。

こうした女性のキャラクター化に関連する別の例も挙げられている。すなわち女性は男性の勇敢でヒーロー的な活躍を認知するための人物であるというものである。そしてまた男性は死を哀しまない一方で、女性は男性の死を弔うという重要な役割を担っている。Michael Murphy (1985: 105 - 112) はこれに対して「騎士道、凶暴性、ぎこちなさの奇妙なミックスによって若い女性を楽しませることによって彼女の役割に対して報い、そして剣、盾、騎士の首などによってロマンチックに勝ち取った彼らの征服の結果を、女性にお辞儀をすることによって示している。」と述べている。こうしたことから、女性は男性や社会的障壁の諸々のものを待つつというホステス的な役割を満たしていた

と O'Pray - Reynolds (2013: 39) は述べている。

また他の例を *Lancelot: Knight on the Cart* (ca. 1150) 中にも見いだすことができる。この作品中の女性は「見せかけ」のものである。彼女らは無垢、助けになる性質 (*helpfulness*)、脆さをランスロットに見せつけることから始める。そのうちの一人はランスロットに宿屋として自分の家を利用するように申し出る。そして二人は横になるのだが、ランスロットにとってその女性と寝るのは単に姫を救うエネルギーを回復するための休息に過ぎない。ランスロットは最初に彼女の誘惑を拒絶する。というのも彼は姫を大いに愛しているからである。ここでこの女性はランスロットがどれだけ姫への愛に対して忠実であるかということを観客にアピールするためのキャラクターとして描かれている。その後、ランスロットは嘘の攻撃か

ら彼女を救い出すことになる（O'Pray -
Raynolds 2013 : 41）。

*Sir Gawain and the Green
Knight*（12世紀）中においては貴婦人
ベルシラックがガウェイン卿を誘惑する場
面が描かれている。*Lancelot :
Knight of the Cart*中の例に挙げた
女性もこの貴婦人も、どちらもどのよう
に男性が不名誉な行為に誘惑されるかとい
う例としての女性として描かれていること
がわかる。また、どちらもランスロットや
ガウェイン卿との性行為を迫ることから、
社会的抑圧などがない存在として描かれ
ている。（同上 : 42）これらの性行為を
迫る誘惑は先ほど挙げた聖書のイヴが
アダムを誘惑する例と類似していること
がわかる。

中世の生活において女性はどのような
役割を果たしていたのであろうか。O'Pray -
Raynolds（2013 : 43）によると歴
史的史実には女性が何らかの形で宗教
に關与

しない限り女性が出てくることは全くないという。C o o k & H e r z m a n (2 0 0 4 : 1 6 7) は「契約書や誓約書などの文書に出てくる女性の活動の頻度は封建社会の中の女性の役割は我々が想像しているよりもより複雑であることを示している」と述べている。先ほどまでに挙げた話の女性の登場人物の数と実際の文書に出てくる女性の数を比較するとその差は驚くほど大きいものになると想像される。物語には描かれて実際には出てこないという結果から分かるのは、女性がそれほど「卑しい」存在として見られていたことを示す手がかりとなるだろう。

L a n c e l o t : K n i g h t o f t h e C a r t

中の女性は変化の始まりを示している。すなわち彼女らは単純な犠牲者で他の登場人物を助けるような存在ではなく、彼女ら自身の強さや意思を表す人であったということが言えよう。女性の弱くて犠牲者的な囚

われの姫 (*d a m s e l i n d i s t r e s s*) と
いう見方が理想とされたのは *L a n c e l o t :
K n i g h t o f t h e C a r t* の何世紀も後の
ロマンチックなヴィクトリア時代のことで
ある。しかしそこには、中世の教会から受
け継がれた女性は男性を摘みに導くという
男性よりも強い力を持ち合わせているとい
う暗黙の強調が潜んでいる (*O ' P r y -
R a y n o l d s* 2013 : 43) 。従っ
て女性は男性よりも強い力を持ち合わせて
いるが故に「卑しい」存在として見なさ
れ、今日に至るまで「男性よりも下」とい
う地位に置かれることが多かったのではな
かろうか。

これまでで、女性が男性よりも「下」の
地位に置かれてきたことがわかった。では
なぜ、男性の方が女性よりも権力を握るよ
うになったのだろうか。

レザーイ (2013 : 175) はこの手がかり
を「罵倒語」、特に「性的罵倒語」に求め

ている。そこで重要となるのが「ファルス（phallus）」という概念である。彼の言う「ファルス」とはすなわち男の『犯す』能力・欲望を表す「（性的）攻撃性」、ひいては『犯されること』を防ぐための「防御性」を象徴する概念である。レザーイは罵倒語を図4にあるように分類している（レザーイ 2013：177）。

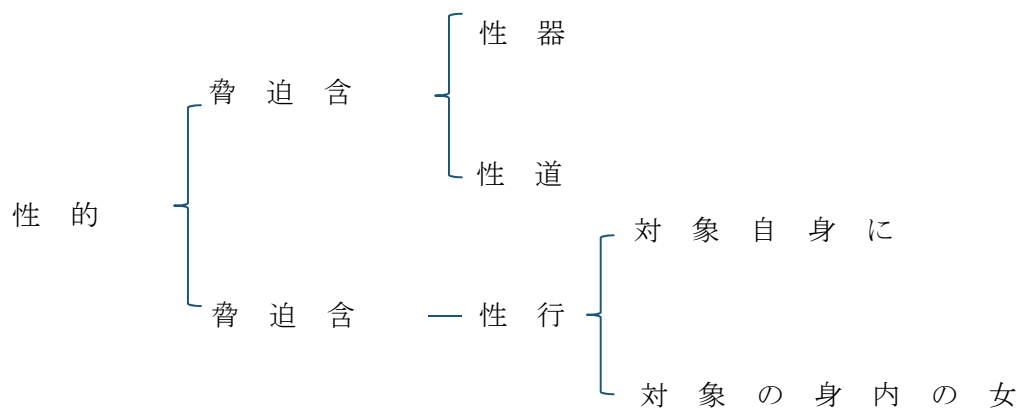


図 4 . 性的罵倒語の分類（レザーイ 2013）

『性的嫌がらせ』を示唆する言葉を発することで、対象を侮辱し、そして対象が侮辱されることによって、自分の緊張を解消

されること」を意味する。図中の「脅迫含意がある」の次には「性行為」とあるがこの場合、これは罵倒語として使用されるので「強姦」のニュアンスが加わり、また男女間のみならず男同士の性的交わりも含意し使用されるようになる。従ってこの罵倒語には「強引に性行為を行う」すなわち「犯す」という用語が使われる。この「犯す」という行為を行うことができる能力を持っているのは「男」であり、従ってこの「犯す」という言葉を使用できるのも「男」である。なぜなら、そもそも女性には強引な性交を成し遂げるための手段が揃っていないからである。田中（1997：11）によると性交というものは必ずそれぞれが能動と受動の役割を受け持つことになるため、男同士であっても「犯す」側と「犯される」側に分けられてしまわざるを得ない。男には「犯す」ための手段＝男性性器が自然的に与えられている以上は、女

が犯される側となり、ひいては「犯す」という行為そのものを明示している罵倒語の使用権も、その対象が女であろうが男であろうが、もともと犯せる能力を持っている男にある。ピンカー（2009：72）によるとこの罵倒語が *f u c k* の場合もその主語は基本的に男性であって、もし男性同士の恋である場合には *A f u c k e d B* と言えるのは *A* が上に乗った時、また女性同士の場合には、前者が張形を使った場合だという。またデュル（1997：224）が指摘するように、時代を問わず様々な社会で、男性による性行為を言い換えて *s h o o t*、*s t i c k*、*h i t*、*k i l l*、*r u b b i s h* などと表現する。これらの意味の変化から見て取れるように多くの人間社会において、性交は攻撃性や暴力性の性質を伴っている行為とみなされており、男性に攻撃するような手段、すなわち男性性器（＝ファルス（*p h a l l u s*））があるというのは罵倒語

が男同士の世界で通じる言語であるということを示している。(レザーイ 2013: 178 - 183)

4. 4 意味変化の要因

ここまで *fuck*、または性的罵倒語を男が使うものとして使われてきたことについて述べた。レザーイ(2013: 176)は罵倒語の別の段階として挨拶表現や決まり文句のように、その発する言葉の意味をあまり深く考えずに使用する「意味飽和」という現象が起きていると指摘している。例えば池田(1969: 93)によると昔の武将は命をかけての戦いの前に「南無弓矢八幡」と祈ったが、後世の大衆は、なんでもない時に「南無三宝」、「南無三」などと言うようになったという。これはおそらく、当初の命をかけての戦いの際にはまだ「お願いします(=南無)」という意味をもち、それを意識した上で使用されていたと考え

られる。しかし、「お願いします」や「頼む」といった言葉は我々の生活上でよく使われる言葉であるがゆえに「南無」という言葉が至るところで多く使用されるようになった。従って、最初に「南無」が持っていた意味（＝お願いします）は意識されずして広く一般に使われていったものと考えられる。インターネットなどのメディアがもちろん皆無の時代では「口伝」がコミュニケーションの主な手段である。最初は誰か（Aとする）が「お願いします」という意味で「南無」と言ったことを別の人物（Bとする）が聞き、BがAは「お願いします」という意味ではなく「何かをする時」に「南無」と言っていたのだと解釈してB自身も「何かをする時」に「南無」を使用する。この一連の流れが「南無」という言葉の意味を薄めていき、最終的に「何もない時」に「南無」と言うようになったのではないかと考えられる。この意味飽

和という現象を整理して *f u c k* に適用し考えてみる。

F u c k は当初「～を打つ」という意味を持っており、次第に「性行為をする」という意味を持つようになることは述べたとおりである。これが時代の移り変わりとともに、この章の冒頭で述べた意味を次々と獲得していく中で、様々な状況において *f u c k* が使用される時期があったと考えられる。そして「南無」の例のように、*f u c k* の意味を正確に知らない人物（「南無」の例の B に当たる）が *f u c k* を自分なりの解釈で使用し、また他の人物がそれを真似していくという繰り返しにより *f u c k* に意味飽和が生じ、例えば自分の指を金づちで叩いてしまった時などに *F u c k !* と叫んでしまうような自体に発展して言ったのではないかと考えられる。つまり、この「意味飽和」によって *f u c k* が頻繁に日常生活において使われる頻度が増えたこと

と、デュルが先ほど指摘していた罵倒語の攻撃的な意味変化が *f u c k* に「強意」の意味を持たせることになったと考えられる。

またこれに加えて、三章で述べた *s o u n d s y m b o l i s m* も関係して「強意」の意味を持つことになったといえよう。すなわち、摩擦音が当初は男性性器と女性性器の上下運動を表していたが、「意味飽和」が起きるにしたがって強調するため、空気を強く吐き出す構造を利用していったのではないかと考えられる。つまり、音が「性行為」「強意」の双方の意味を帯びるようになったのである。

これを、言語学的に検証する。小笠原(2013)によると、古英語期から中英語初期にかけて広く強意語として使用された *s w i t h e* と、中英語期において強意語として使用された *f a s t* がどちらも‘*r a p i d l y*’という速度の意味を獲得した。これと同じ例が他にも見られることが

述べられている。例えば *w i g h t l y* ,
q u i c k l y は本来、「いきいきと」や「激
しく」という意味で用いられていたが、中
期英語で「速く」という意味を派生させ
る。また *s m a r t l y* も本来は「激しく、鋭
く」という意味で動作動詞を修飾したが、
14世紀初頭に「速く」という意味を派生
させた（小笠原 2013 : 25）。

また、Mustanoja (1960) は
s w i t h e と *f a s t* を *d e g r e e a d v e r b s*
の項で以下のように説明している。

S W I T H E (S W I T H E L Y) —
F r o m O E *s w i p e* ‘strong.’
I n t h e m e a n i n g ‘ e x -
t r e m e l y , m u c h , v e r y ’
t h i s a d v e r b i s t h e m o s t
p o p u l a r i n t e n s i f i e r o f
a d j e c t i v e s , a d v e r b s , a n d
v e r b s i n O E a n d e a r l y

M E *s w i p e* b e g i n s t o
g i v e w a y t o o t h e r i n t e n -
s i f y i n g a d v e r b s , n o t a b l y
f u l l , *w e l l* , a n d *r i g h t* , i n
c o n n e c t i o n w i t h a d j e c -
t i v e s a n d a d v e r b s , a n d t o
m u c h a n d *g r e a t l y* i n c o n -
n e c t i o n w i t h v e r b s . I n
t h e s e c o n d h a l f o f t h e
1 4 t h c e n t u r y *s w i t h e* i s
o n l y o c c a s i o n a l l y f o u n d ,
a n d a f t e r 1 4 5 0 i t i s n o
l o n g e r r e c o r d e d a s a n i n -
t e n s i f y i n g a d v e r b . (M u s -
t a n o j a 1 9 6 0 : 3 2 5)

F A S T (E) — T h e o r i g i n a l
m e a n i n g o f t h i s a d v e r b
i s ‘ i m m o v a b l y . ’ I n m a n y
c a s e s i t s o r i g i n a l m o d a l

f u n c t i o n p a s s e s i n t o a n
i n t e n s i f y i n g u s e , a s i n
f a s t a s l e e p a n d f a s t b y
(e . g . , t h e T a b a r d f a s t e
b y t h e B e l l e , C h . C T A
P r o l . 7 1 9) , a n d i n c o n -
j u n c t i o n w i t h v e r b s (s h e
f a s t e A y b i d d y n g e i n h i r e
o r i s o n s f u l f a s t e , C h . C T
G S N 1 4 0) . (M u s t a n o j a
1 9 6 0 : 3 1 8)

S w i t h e は本来「強い (*s t r o n g*) 」と
いう語義から、強意用法が発達し、
' *e x t r e m e l y* , *v e r y m u c h* , *v e r y* '
の意味で用いられるようになった。
S w i t h e は古英語から中期英語初期にかけ
て形容詞、副詞、動詞を修飾する最も一般
的な強意語であったが、次第に形容詞・副
詞修飾の場合は *f u l l* , *w e l l* , *r i g h t* 、

動詞修飾の場合は *much* , *greatly* など
に取って代わられたことが述べられている。
また *fast* の場合は、本来の
'*immovably* , *firmly*' と言った容態
を表す意味から強意用法への展開が示唆さ
れている (小笠原 2013 : 31) 。

また図5にあるように、近代英語におけ
る *fast* の共起動詞を見た場合、この時期
には強意用法は見当たらないために
'*firmly*' と '*rapidly*' の二つの語義
に収斂したことがわかる。この中で *run* ,
go , *come* などの移動動詞も高頻度で現
れていたものの、一番多く共に使用された
のは *grow* であった。これは *fast* が単体
で '*rapidly*' の語義を持ち、*manner*
adverb として動詞を修飾する用例がほと
んどであり、このことから '*rapidly*' の
語義が副詞自体に定着したことが共起動詞
のタイプによって鮮明に示されている (小
笠原 2013 : 38) 。

1.firmly		2.rapidly,quickly	
stand	10	grow	6
bind	7	run	6
hold	3	as f. as = as soon as	5
sit	2	go	3
wind	1	come	3
have	1	fly	3
entrap	1	follow	3
swear	1	breed	1
		bring	1
		come f. upon	1
		cut	1
		die	1
		do	1
		drop	1
		fade	1
		find	1
		give	1
		glide	1
		haste	1
		heal	1
		pace	1
		pelt	1
		ride	1
		sin	1
		sing	1
		speed	1
		spur	1
		vent	1
		vie	1
		wane	1
		weep	1
		work	1

図 5 . Modified Verbs in Shakespeare's Works (1564 - 1616)
(小笠原 2013 : 39)

以上の Mustanoja (1960) と小笠原 (2013) より *swiftly* や *fast* が「本来の意味」→「強意の意味を獲得」→「速度の意味を獲得」という一連の過程を経てきたこと、また速さのスケールが内包される動詞が強意副詞と共に使用されるとより速い状態が指し示される場合があることの二点が確認できた。この強意→速度への意味の転換はおおよそ古英語から中英語に移行

する約 500 年の間に起こった出来事である
ということが出来る。 *F u c k* は 4 章の冒頭
で述べたとおり 1500 年ごろに「打つ」と
いう意味をもち、1650 年ごろに「性行す
る」という意味を派生させた。O E D によ
ると強意語としての *f u c k* が最初に用いら
れた記録は以下のものである。

(1 0) A m a n ... u t t e r e d u n d e r
 h i s b r e a t h a m o n o s y l l a b i c
 c u r s e . ‘ F u c k . ’ (1 9 2 9
 F . M a n n i n g M i d d l e P a r t s
 O f F o r t u n e I I . 1 6 1)

1929 年に強意語としての使用が認めら
れたということは *f u c k* も *s w i t h e* や
f a s t と同じく約 500 年毎に新しい意味を
獲得しているということがわかる。小笠原
(2 0 1 3) の *s w i t h e* と *f a s t* の例では
「本来の意味」 → 「強意の意味」 → 「速

度」 というパターンが見られた。このパターンに関しては、迅速の概念を含まない動詞であっても、強度が付与されることにより動作に連続性が生まれ、結果迅速へと意味が拡張する、と説明がなされている（小笠原 2013 : 40）。この説明より、*f u c k* は現在「強度が付与された状態」であるということが出来る。ここからまた、強度よりも意味が拡張され、他の意味を獲得していくと推測される。

4 . 5 ま と め

この章では文化と語用、二つの観点から強意語としての *f u c k* について考えてきた。前者からは *f u c k* は意味飽和現象を起こしたことによって意味拡大が進み、後者では *f u c k* が現在強度を付与された段階であることがわかり、これまでの強意の副詞の歴史的意味変成を見ていくと、この単語

もこれから意味変化をしていくかもしれないということがわかった。

第 5 章 結 論

本論文では *f u c k* という言葉が多くの意味を持っていることから、祖ゲルマン語に遡り語源を探った。そのゲルマン語から派生した言葉は「f + 短母音 + 破裂音」という構造を共通して持っていることがわかった。そして *s o u n d s y m b o l i s m* の観点から見て、*f u c k* は「摩擦」「停止（口内で呼気を止める）」という構造を持っておりそれは性行為を体現しているのではないかという考えにたどり着いた。また *f u c k* という言葉を発音するためには摩擦音、破裂音という音を発生させる過程を必要とするために呼気を口内に溜めて一気に外部に出す。そこから転じて強意の意味を持つようになったと考えられることについて述べた。さらに他の強意の副詞にも破裂音と摩擦音を持つ語が多く見受けられた。

4 章では *f u c k* を文化と語用の二つの視点で見た。文化の面では、中世の教会による女性差別を生み出し、それが男性より女性は下の立場に置かれるという考えを生み出したことについて述べた。なぜこのように女性が下の立場に置かれ、男性が権力を握ることが多かったのかについてひとつの考えをレザーイ（2013）の述べたファルス（*p h a l l u s*）すなわち「（性的）攻撃性」かつ「（性的）防御性」という概念から導き出すことができた。すなわち男性器が備わっている男にのみ「犯す」という行為が可能であることから男にのみ攻撃＝罵倒語（=*f u c k*）を使う権利があることを暗に示していると言えよう。

また語用の面からは強意の意味に着目し小笠原（2013）の *s w i t h e* や *f a s t* の意味変化を手掛かりに、*f u c k* がそれらと同じような意味変化を起こしていることについて述べた。つまり、この単語は元の

「～を打つ」という意味から派生、意味飽和を起こし現在の強意の意味に至ったと考えられ、これはまた *s w i t h e* や *f a s t* のパターンに当てはめると強意の意味の次に新たな意味を獲得していくことが推測される。こうした言語の変化を予測することによってより早く言語の変化に気づくことができ、ひとつにはそれを AI などの言語システムに取り込ませより人間に近いコミュニケーションをとることが可能になることが期待される。またふたつ目としては当初の意味から離れていくことが男女差別が解消されてきている一種の指標になるのではないかと予想される。